［2］東北南部

飯村 均

はじめに

陸奥南部は主に，岩手県・宮城県・福島県地方を扱い，便宜的に陸奥中部と南部を分けて呼ぶときは，前者が岩手県地方，後者が宮城県・福島県地方を指すこととする。出羽は秋田県・山形県地方として扱い，資料的な制約から地域区分は避けることとした。

❶……陸奥中部（岩手）

食 膳 具

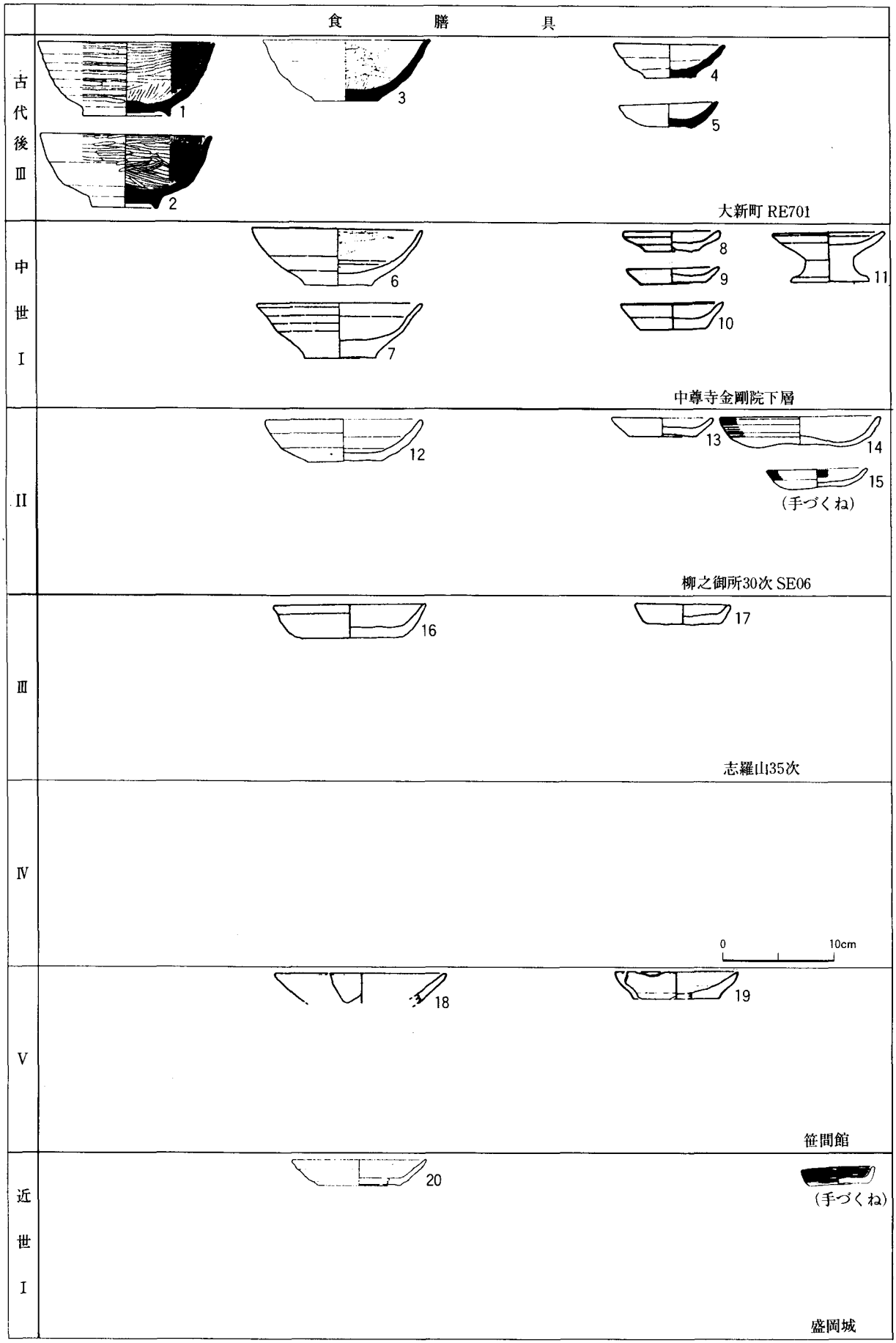
陸奥中部では，盛岡市・平泉町周辺で，良好な資料の蓄積があり，研究も盛んである〔八木1989・93〕〔八木ほか1994〕〔井上ほか1994〕〔及川1994〕〔松本1992・93・94〕。その成果を援用すると，図1のようになる。古代後Ⅲ期の土器群として盛岡市大新町遺跡701号竪穴住居跡の一括資料が挙げられる。丁寧なヘラミガキ・黒色処理を施した高台付椀・椀と，口径9cm強のロクロ調整，底部回転糸切りの小皿のセット〔八木ほか1983〕で，八木光則氏は11世紀前葉に比定している〔八木1993〕。中世Ⅰ期は，平泉町中尊寺金剛院の下層から出土した一括資料が挙げられる。ロクロ調整，底部回転糸切りの椀・皿のセットで，椀は口径12～15cm，皿は9cm前後である。及川司氏は平泉遺跡群での比較や中尊寺創建の年代などから，11世紀末12世紀前葉に比定している〔及川1994〕。

中世Ⅱ期の平泉遺跡群の調査による資料は多いが，ここでは柳之御所跡第30次調査の6号井戸跡出土の一括資料を挙げた。手づくねとロクロ整形の2者があり，前者が多い。手づくねかわらけはユビオサエとナデ調整により整形し，ロクロ整形のかわらけは底部回転糸切り，不調整で，底部外面に「板状圧痕」，見込みにナデ調整がある。両者とも大小2法量で構成され，口径12～16cmと7～10cmを測る。共伴した折敷底板の年輪年代測定結果から1177年は遡らないことがわかっており，1170・80年代に比定されている〔八重樫1994〕〔八重樫ほか1994〕。

中世Ⅲ期になると資料は少なくなり，平泉遺跡群で散見される程度であったが，最近の志羅山遺跡第35次調査で良好な資料が出土した。手づくねかわらけは全く伴わず，ロクロ整形のもののみで構成され，口径13cm前後と口径9cm前後の大小2法量で構成される。ロクロ整形で，底部に「板状圧痕」が残り，見込みにはナデ調整がある。平泉遺跡群でのかわらけの比較検討や，鎌倉のと対比から13世紀後葉から14世紀前葉に推定され，藤原氏以降の平泉を考える上で重要とされている〔八重樫1995〕。

中世Ⅳ期以降の資料は極端に少くなり，「かわらけ溜まり」的な資料は近世盛岡城まで確認でき

図1　陸奥中部


食　膳　具
古代後Ⅲ
1
2
3
4
5
大新町 RE701
中Ⅰ
6
7
8
9
10
11
中尊寺金剛院下層
Ⅱ
12
13
14
15
（手づくね）
柳之御所30次 SE06
Ⅲ
16
17
志羅山35次
Ⅳ
0
10cm
Ⅴ
18
19
笹間館
近世Ⅰ
20
（手づくね）
盛岡城

ず，拠点的な城館跡の調査例が少ないせいもあるが，生活文化の違いを感じる。その中で強いて挙げれば，花巻市笹間館があり，15世紀から16世紀前半とされ，15,000m^{2}を調査して十数点が出土しているのみである。手づくねかわらけも含まれるとされるが，主体はロクロ整形で，口径15cm，10～20cm，6～8cmの3法量になる可能性がある。出土量が少なく，実態は不明な点が多い〔高橋ほか1988〕。

近世Ⅰ期は盛岡城跡石垣修理に関連した調査の資料である〔室野ほか1991〕。手づくねかわらけは17世紀の層から出土し，ロクロ整形，回転ヘラケズリ再調整のものは18世紀後半のかわらけ集中区から出土している。祭祀的な「かわらけの大量使用」の1例である。

以上陸奥中部の食膳具の変遷を概観すると，中世Ⅰ期とⅢ期，近世Ⅰ期に画期を認めることができる。中世Ⅰ期の画期は古代後期にその萌芽が見られた土器の「大量使用・大量廃棄」〔吉岡1994〕〔村田1995〕であり，椀・皿という2器種への器種の単純化である。中世Ⅱ期には平泉遺跡群で，京都型の「手づくねかわらけ」が大量に生産・使用され，ロクロ整形のかわらけの器形も手づくねかわらけにすり寄っていく。まさに「かわらけ大量使用」の全盛期を迎える。中世Ⅲ期になると「手づくねかわらけ」は消滅し，平泉遺跡群でも鎌倉型のロクロかわらけしか出土しない。しかも，出土遺跡が極端に減少することから，平泉遺跡群の衰退以降は「非かわらけ文化圏」〔小野1991〕であったとも評価できる。中世Ⅳ・Ⅴ期も出土例を探すことが困難なほどであり，近世盛岡城に至って再び「祭祀・儀礼の器」としての大量廃棄が確認される。

❷……陸奥南部1（宮城）

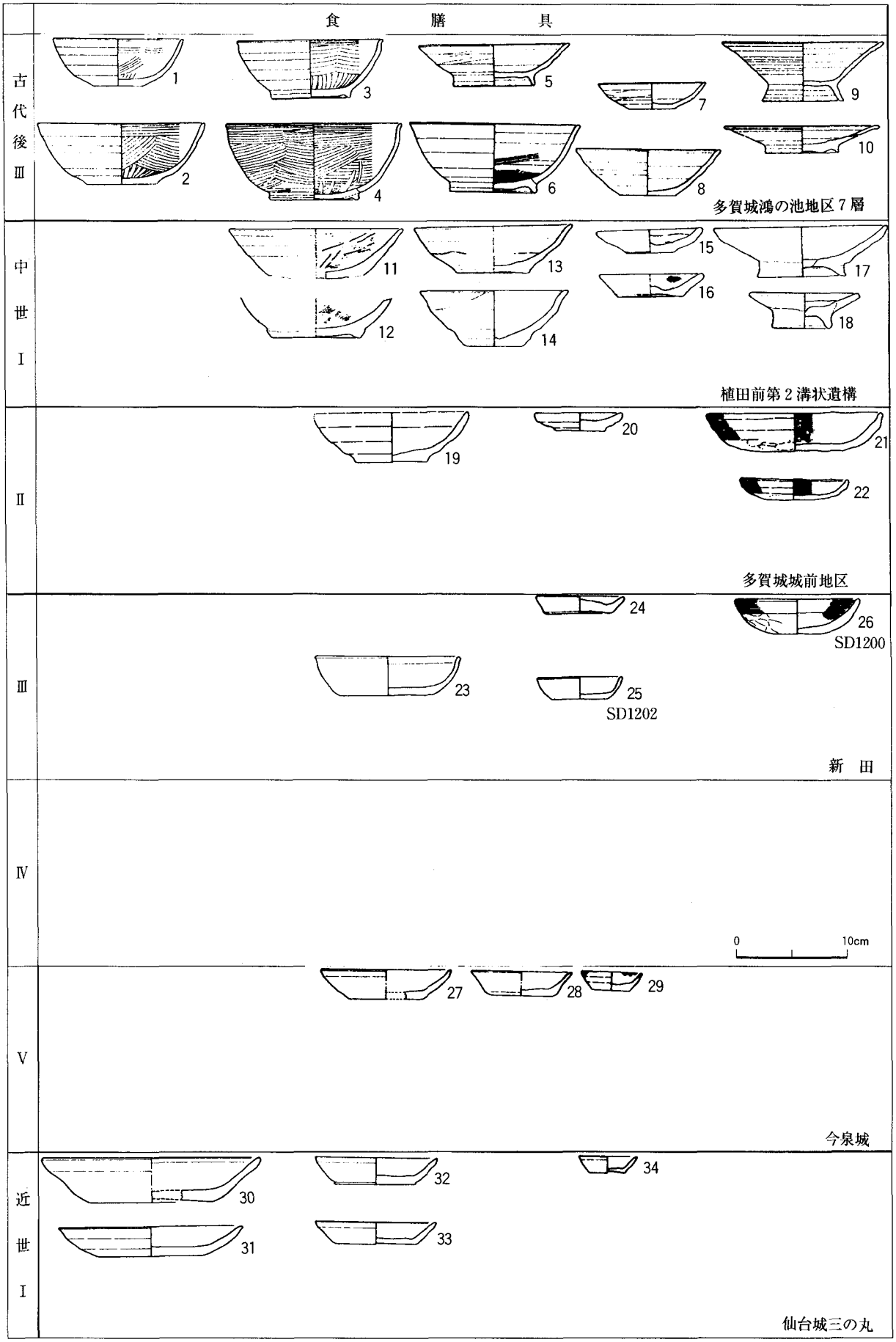
食膳具

陸奥南部のうち宮城県地方については，多賀城跡周辺を中心に図2に大まかな変遷を示した。古代後Ⅲ期としては多賀城跡第61次調査鴻の池地区7層の資料があり，934年前後に降下したと考えられる灰白色火山灰などとの関係から，10世紀中葉とされている〔柳沢ほか1991〕〔柳沢1994〕〔村田1994・95〕。土師器杯・椀・高台付椀，須恵系土器杯・椀・皿・高台付椀・高台付皿・足高高台付椀などの器種に加えて，土師器耳皿・甕，須恵系土器台付鉢・羽釜，須恵器杯・甕・壺などがある。須恵器系土器と土師器の比率は3：1で，須恵器・施釉陶器はわずかである。

中世Ⅰ期には植田前遺跡第2溝状遺構出土資料〔加藤1981〕が挙げられ，型式学的な検討から11世紀代に比定されている〔飯村1990〕〔柳沢1994・95〕〔村田1994〕。前述の陸奥中部の中尊寺金剛院下層資料との対比から，11世紀中葉以前と推定される。土師器高台付椀，須恵器系土器椀・皿・高台付椀・高台付皿，須恵器甕・壺で構成され，須恵系土器が9割以上を占める。皿は口径9～10cmを測り，小型化する。同時期の資料として多賀城跡SK078・SE1066が挙げられる〔村田1995〕〔柳沢1994・95〕。

中世Ⅱ期には多賀城跡城前地区から出土した，平泉遺跡群と同時期の資料が挙げられる〔藤沼ほか1991〕。多賀城跡政庁と南門をつなぐ道路を壊して，平場，掘立柱建物跡・土坑・溝跡・井戸跡が調査され，出土したものである。図示したものは技法・器形とも，前述の柳之御所跡出土かわらけと類似し，12世紀後半と推定される。周辺からは白磁椀Ⅳ・Ⅴ類，青磁椀龍泉窯系Ⅰ－5類，常

図2　陸奥南部(1)


食　膳　具
古代後Ⅲ
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
多賀城鴻の池地区7層
中世Ⅰ
11
12
13
14
15
16
17
18
植田前第2溝状遺構
Ⅱ
19
20
21
22
多賀城城前地区
Ⅲ
23
24
25
SD1202
26
SD1200
新　田
Ⅳ
0
10cm
Ⅴ
27
28
29
今泉城
近世Ⅰ
30
31
32
33
34
仙台城三の丸

滑片口鉢・三筋文壺・甕，滑石製温石などが出土している。

中世Ⅲ期には新田遺跡SD1200・1202溝跡出土資料を挙げた。新田遺跡は中世陸奥府中に関わる在庁官人の館群で，その区画溝跡から出土している。伴出遺物は瓷器系陶器甕・鉢，青白磁合子，青磁椀同安窯系Ⅰ類，青磁椀龍泉窯系Ⅰ－2・4・5類，龍泉窯系青磁盤・酒会壺などであり，13世紀から14世紀前半に機能した溝跡とされている〔千葉ほか1990〕。かわらけには手づくね整形とロクロ整形の2者があり，器形的には類似性が強い。ロクロ整形のものは見込みナデ調整や，底部外面に板状圧痕が残る。手づくねかわらけは地域性が強いが，ロクロ整形かわらけは鎌倉型の東日本通有の器形である。

中世Ⅳ期の確実な資料は公開されていないが，松島町円福寺跡（瑞巌寺境内遺跡）〔新野1992・93〕や名取市熊野堂大館跡〔恵美1992・93〕などで検出されている。かわらけの使用状態の変化については不明だが，拠点的な遺跡では一定量使用されたことが確認できる。地域支配の拠点が沖積地から丘陵部へ変化したことが，調査・検出事例の少ない要因と考えている〔飯村1995〕。中世Ⅴ期は今泉城跡1号溝跡出土資料を挙げた。1号溝跡は伴出遺物から16世紀後半から17世紀前半とされ，近世Ⅰ期の資料も含まれる。かわらけはロクロ整形，底部回転糸切りのもので構成され，大量使用・大量廃棄などの使用形態は認められず，灯芯痕・煤付着のある資料が認められ，使用形態の変化が看取される〔佐藤ほか1983〕。近世Ⅰ期のかわらけと器形・技法が類似し，継続性がわかる。

近世Ⅰ期は仙台城三の丸跡Ⅱ区6・9号土坑出土資料を挙げた。1601～37年のゴミ穴とされ，出土遺物も17世紀前半と考えられる。ロクロ整形，底部回転糸切りで，20cm・11cm・5cm前後の3法量に分かれ，二枚重ねで灯明皿として使用されたものとされている。調査区には茶室の存在が推定され，茶室の灯明皿及び風炉の「前かわらけ」の可能性が指摘されている〔佐藤ほか1985〕。

以上，陸奥南部—宮城県地方—の食膳具の変遷を概観すると，中世Ⅰ期と中世Ⅳ期に大きな画期を見いだすことができる。中世Ⅰ期には土師器・須恵器や灰釉陶器模倣の器種が撤退し，椀・皿の2器種・1法量に単純化し，大量使用・大量廃棄が行われている。ただし，植田前遺跡段階では，土師器・須恵器や灰釉陶器模倣の器種がごく少量残り，古代の終末と見ることも可能である。おそらく，これに後続する時期に中世的な器種構成が完成されるものと推測され，11世紀後半に画期を置くことができる。さらに，中世Ⅱ期には「手づくねかわらけ」の導入と，ロクロかわらけとの器形の互換性という変化が認められる。この「手づくねかわらけ」の導入にあたっては，その類似性から陸奥府中と奥州平泉政権との関係が示唆される。中世Ⅳ期の画期は資料が未発表で明確にできないが，技法・法量的な変化と，使用形態の変化—灯明皿へ—としてとらえることが可能である。近世Ⅰ期への変化の萌芽をみることができる。

❸……陸奥南部2（福島）

食膳具

陸奥南部のうち，福島県地方について中山雅弘氏による体系的な研究〔中山1985・88・92〕があり，それによりつつ新資料を中心に概観したい。古代後Ⅲ期には馬場中路遺跡5号家屋出土資料を挙げた。火災家屋で一括性の高い資料である。土師器杯・高台付椀，須恵系土器椀・杯・皿・高台付皿・高台付椀・高台付鉢である。須恵系土器が

9割以上を占め，「陸奥南部1」の変遷を参考に，11世紀前半と推定した〔飯村1990〕。

中世Ⅰ期の資料として，桜木遺跡窯状遺構の一括資料が挙げられる。椀・皿の2器種と，六器模倣と考えられる高台付小椀1点のみが伴う。11世紀後葉に推定され，平窯の可能性が指摘されている〔柳沼ほか1983〕。椀は形態的に白水阿弥陀堂境内域出土資料に類似し，12世紀に下る可能性も指摘されている〔中山1985・88〕。皿についても口径約10cmと大きめで，器形を考慮しても，型式学的に「陸奥南部1」の植田前遺跡例を遡る可能性はない。したがって，中世Ⅰ期の土器群と判断した。

中世Ⅱ期としては，荒小路遺跡〔大越ほか1985〕と艮耕地A遺跡2号溝跡出土資料〔押山ほか1985〕を挙げた。手づくねとロクロ調整のかわらけが共存し，型式的には荒小路例が先行する可能性が高い。ロクロ調整のものは板状圧痕や見込みナデが残り，鎌倉型の東日本通有の形態となっている。手づくねかわらけは，荒小路例は平泉的な技法・形態を相対的に残しているが，艮耕地例はすでに地域色が強い形態・技法となっている。法量的には11cm前後と8cm前後の2法量に分かれる。

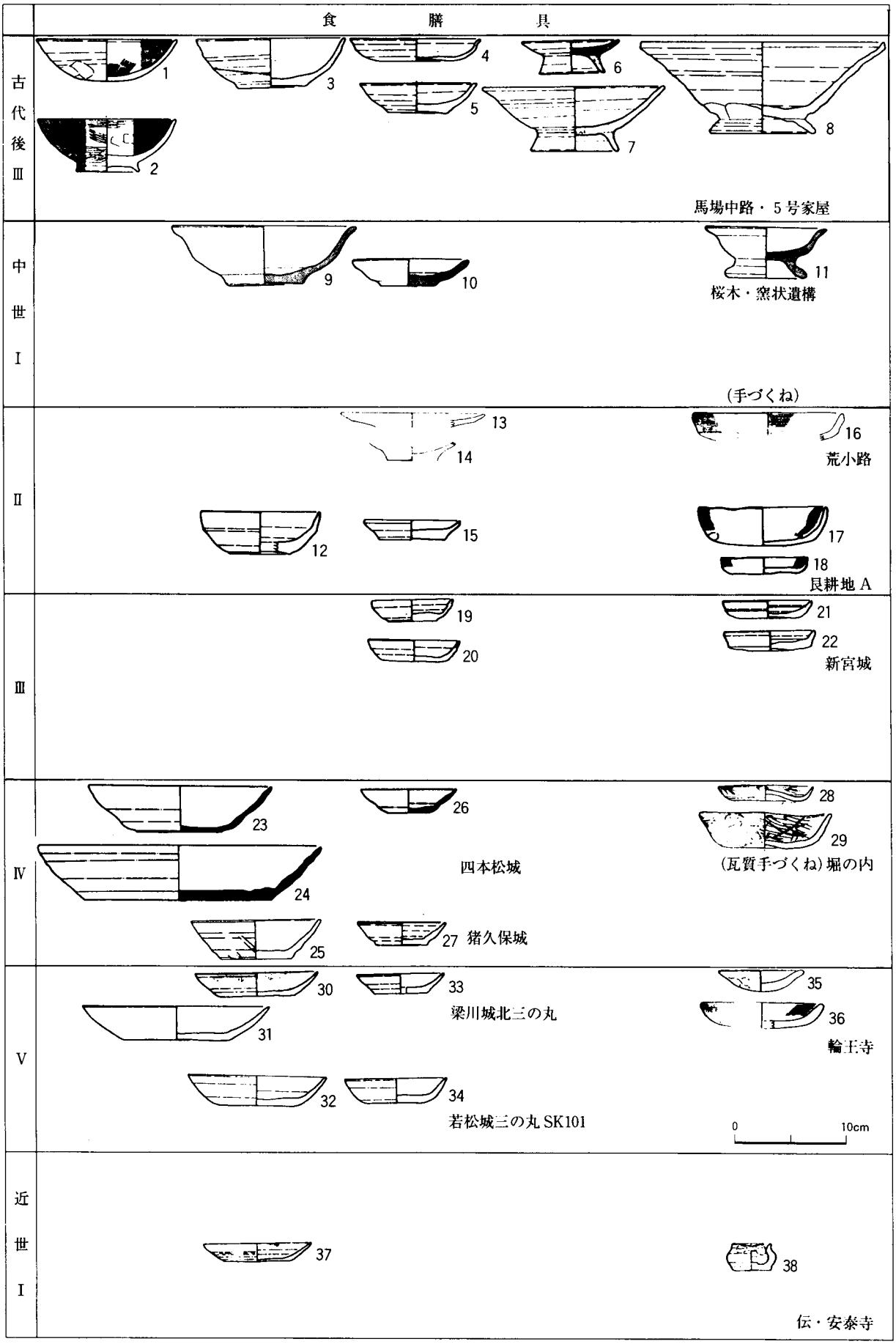
中世Ⅲ期として新宮城跡出土資料が挙げられる〔鈴木ほか1974〕。ロクロと手づくねかわらけの2者があり，ロクロ整形のものは底部回転糸切り，見込みナデ，板状圧痕が観察される。器形的には鎌倉型の東日本通有の器形といえる。手づくね整形のものは，地域色が強い形態・技法で，ロクロ整形のものと器形的に互換性がある。法量的には8cm前後の小皿しか確認できない。伴出遺物から13世紀後半の可能性を考えている。

中世Ⅳ期は資料が比較的豊富で，ここでは四本松城跡〔鈴木1976〕・猪久保城跡〔飯村ほか1994〕の山城跡と，堀の内遺跡〔高橋ほか1992〕という墓地を挙げた。四本松城跡は文献史料や型式学的な検討から15世紀前半から中頃に比定され，中山氏〔中山1988〕によっても追認されている。猪久保城跡は出土遺物から14世紀後葉から15世紀前半に限定される山城跡で，型式的にも斉一性が高い。両山城跡はロクロ整形のかわらけのみで構成され，底部の板状圧痕や見込みナデの手法は全資料には見られなくなり，祭祀儀礼用の灯明皿として使用された個体が散見される。法量的には12～16cm前後と8cm前後の2法量を基本として，25cm前後の大型のものが希に伴う。同時期の良好な事例としては，南古館跡〔市川1988〕・荒川館跡〔中山ほか1985〕がある。

また，堀の内遺跡では墓坑・火葬所が調査され，手づくねかわらけが少量出土している。高橋信一氏は周辺からの出土遺物から15世紀前半と推定し，筆者は京都の「へそ皿」を意識した器形であることから，15世紀前半と推定した〔鋤柄1994〕。口径13cm前後と7cm前後の2法量に分かれ，胎土はロクロ整形のものと異なり，砂粒を含まない緻密な胎土で，暗灰色を呈する。器面には指頭圧痕や丁寧なユビナデ調整が観察され，器形的には前代の手づくねかわらけの系譜を引くが，底部中央を意図的に盛り上げており，京都の「へそ皿」を意識しつつ，新たな技術導入がなされないまま，従来の技術で製作されたことが看取される。三春城下町など類例（平田禎文氏教示）が見られ，中世田村郡内では田村氏が一定のかわらけ生産者を掌握して，供給していた可能性が指摘される。それは田村氏が熊野先達職を在地支配の根本としていた〔小林1975〕ことと関わるかも知れないが，後考を期したい。

中世Ⅴ期としては，梁川城三の丸跡〔目黒ほか1993〕や会津若松城三の丸跡〔柳内ほか1986〕，輪

図3　陸奥南部(2)


食　膳　具
古代後Ⅲ
1
2
3
4
5
6
7
8
馬場中路・5号家屋
中世Ⅰ
9
10
11
桜木・窯状遺構
(手づくね)
Ⅱ
12
13
14
15
16
荒小路
17
18
艮耕地A
Ⅲ
19
20
21
22
新宮城
Ⅳ
23
24
25
26
四本松城
27
猪久保城
28
29
(瓦質手づくね)堀の内
Ⅴ
30
31
32
33
梁川城北三の丸
34
若松城三の丸SK101
35
36
輪王寺
0
10cm
近世Ⅰ
37
38
伝・安泰寺

王寺跡〔寺島ほか1989〕が挙げられる。梁川城跡北三の丸跡は戦国大名伊達氏の居城であり，伴出遺物から15世紀後半から16世紀前半に比定されている。ロクロ整形のみで構成され，底部の板状圧痕や見込みナデが見られなくなり，灯明皿として使用されたものが多数を占める。口径16cm 前後と口径11cm 前後，口径 8 cm 前後の 3 法量に分かれ，大中小 3 法量となる。同時期と考えられる伊達氏関連の寺院である輪王寺跡では，瓦質の手づくねかわらけが出土しており，注目される。口径11cm と7.5cm を測り，京都の「皿 C」の模倣と推定され，16世紀前半に比定される〔鋤柄1994〕。胎土から在地産と推定され，瓦・瓦質土器工人が注文に応じて，器形のみ京都型を意識した手づくねかわらけを製作したものと推測される。会津若松城三の丸跡101号土坑出土資料は，伴出陶磁器から16世紀末から17世紀前葉に比定される。ロクロ整形のみで，底部からやや丸みを持って立ち上がり，直線的に口縁部に至る器形である。口径12cm 前後と 9 cm 前後を測り，ほとんどが灯明皿として使用されている。

近世Ⅰ期としては伝・安泰寺出土資料〔飯村ほか1984〕を挙げた。ロクロ整形の口径約10cm 前後の皿で，すべて灯明皿として使用されている。文献史料などから17世紀中葉から後半に比定されている。伴出遺物として灯明具である片口小壺があり，田村地方や会津地方で類例が見られる。近世Ⅰ期の資料は白河城跡や三春城下町などの近世城郭や城下町での調査例が急増しており，良好な資料が公開されるものと期待される。

以上陸奥南部のうち，福島県地方を食前具の変遷を概観した。中世Ⅰ期と中世Ⅳ期には画期が認められる。中世Ⅰ期には土師器や灰釉陶器模倣器種が消滅し，椀・皿の単純な器種構成が完成し，古代後期と中世を画する。中世Ⅳ期には中世前期的な製作手法—板状圧痕と見込みナデ—が目立たなくなり，灯明皿としての使用が多くなる。ここにも画期を見い出すことができる。また，近世Ⅰ期には「かわらけ＝灯明皿」となり，用途も限定されてくる。中世Ⅲ・Ⅳに見られた大型器種は消滅し，ほぼ 2 法量に限定される。胎土は均質で，器壁が薄く，ロクロ整形痕も斉一性が高くなる。やはり画期と評価できる。

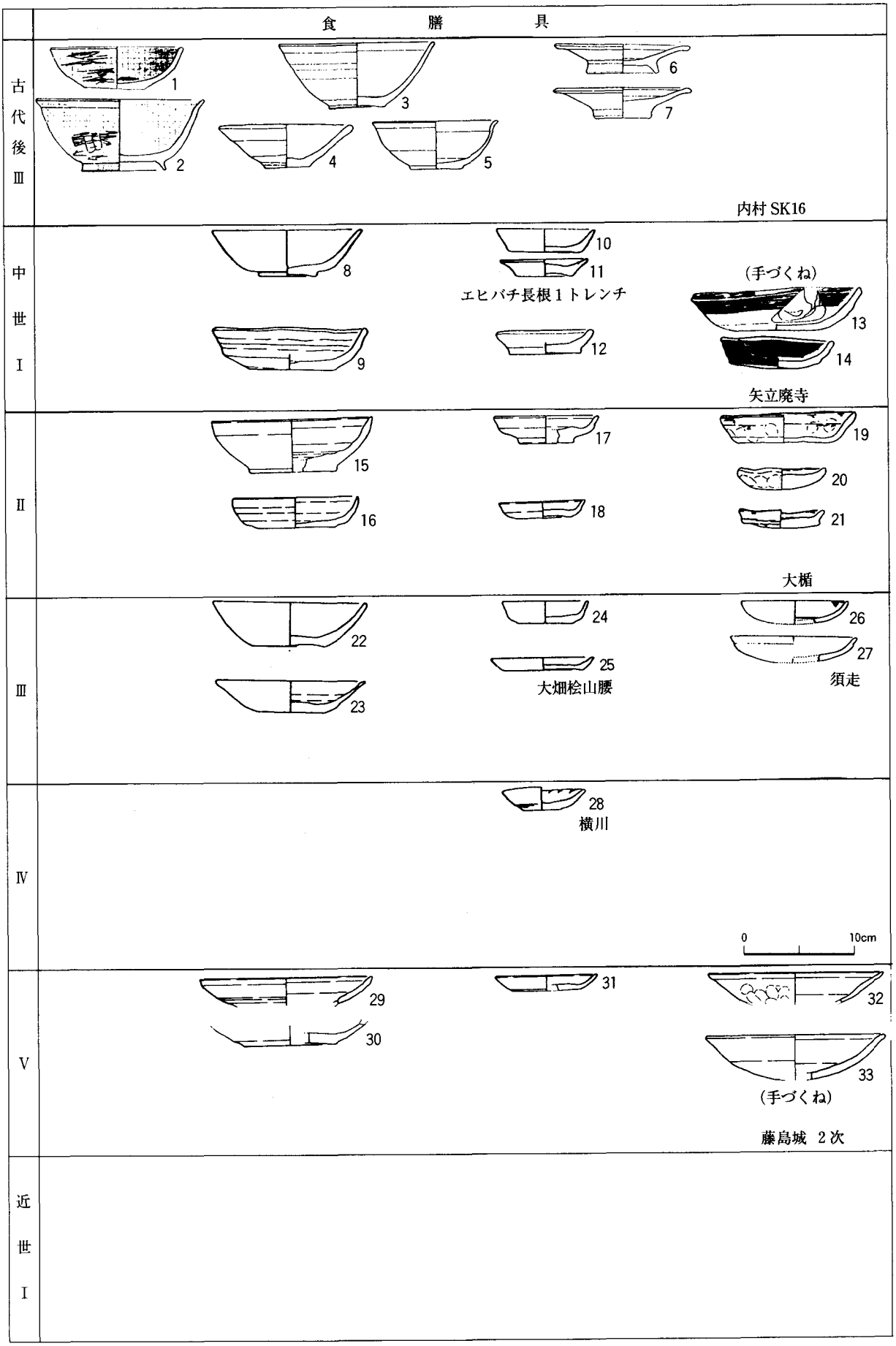
❹……出羽（秋田・山形）

食 膳 具

出羽については体系的な研究でなく，断片的な資料をつなぐ形となるが，変遷を概観したい。古代後Ⅲ期としては秋田県内村遺跡16号土坑出土資料が挙げられ，10世紀中葉から後半に比定されている〔畠山1981〕〔利部1995〕。浅い土坑内から150点以上の土器が出土し，「饗宴儀礼」による一括廃棄の可能性が高い。器種は土師器杯・甕・高台付椀，あかやき土器杯・高台付椀・皿・高台付皿，須恵器長頸瓶・壺・甕である。

中世Ⅰ期としては秋田県エヒバチ長根窯跡〔桜田1990〕，矢立廃寺〔板橋ほか1987〕が挙げられる。エヒバチ長根窯跡は珠洲系陶器窯跡で，珠洲Ⅰ期に比定され，12世紀後半とされている〔吉岡1994〕。1 トレンチから出土したロクロ整形の椀・皿も陶器ではあるが，かわらけを模したものと判断し，ここに図示した。口径13cm 前後の椀と口径 8 cm 前後の皿が確認されている。矢立廃寺出土資料はロクロ整形と手づくねの 2 者があり，器形・法量的に互換性がある。口径14～15cm と口径 8 cm 前後の 2 法量の皿で構成される。前述の陸奥平泉遺跡群出土資料に類似することや伴出

図4　出　羽


食　膳　具
古代後Ⅲ
1
2
3
4
5
6
7
内村 SK16
中世Ⅰ
8
9
10
11
エヒバチ長根１トレンチ
12
(手づくね)
13
14
矢立廃寺
Ⅱ
15
16
17
18
19
20
21
大楯
Ⅲ
22
23
24
25
大畑桧山腰
26
27
須走
Ⅳ
28
横川
0
10cm
Ⅴ
29
30
31
32
33
(手づくね)
藤島城　2次
近世Ⅰ

の陶磁器から12世紀中葉から後半に比定されている。

中世Ⅱ期としては山形県大楯遺跡〔伊藤1988・89〕〔佐藤ほか1991〕が挙げられる。遊佐荘の荘家あるいは出羽国留守所に関わる遺跡であり，13～14世紀に中心がある。ロクロ整形と手づくね整形の2者があり，器形・法量的に互換性がある。器形的には鎌倉型で東国通有のものである。両者とも口径11～13cmと口径7～9cmの2法量の構成となる。

中世Ⅲ期としては秋田県大畑檜山腰窯跡〔長山1996〕と山形県須走遺跡〔佐藤ほか1974〕を挙げた。檜山腰窯跡は珠洲系陶器窯跡で，珠洲Ⅱ期に比定されている〔吉岡1994〕。陶器であるので「かわらけ」と同一視できないが，形態的に類似性があるものと判断し，ここに示した。すべてロクロ整形で，口径12cm前後と口径8～9cmの2法量で構成される。須走遺跡は鎌倉時代の遺跡で，手づくね整形の口径10～11cmのかわらけを出土しており，参考に示した。

中世Ⅳ期の資料はほとんど確認できず，山形県横川遺跡〔佐藤ほか1974〕を参考に示した。鎌倉時代を中心とする遺跡から出土したが，伴出した珠洲片口鉢の年代観や型式的な推定から，ロクロ整形の口径約8cmの小皿1点を示した。底部には板状圧痕が残り，灯明皿として使用されている。

中世Ⅴ期として山形県藤島城跡2次調査の資料を挙げた〔伊藤ほか1990〕。ロクロ整形と手づくね整形のかわらけがあり，ロクロ整形のものは口径15cm前後と8cm前後の2法量である。器壁が薄く，器高が低い偏平な器形で，体部に丸みを持つ特徴がある。手づくね整形のかわらけは口径17cm前後を測り，1法量のみであるが，器形や口縁部の処理は京都のかわらけに類似し，「皿C」の16世紀前半の資料に類似する〔鋤柄1994〕。天文年間前後に汎東日本的に拠点的な城郭に，京都型手づくねかわらけが流入する時期に符合し，注目される〔服部1995　服部実喜氏ご教示〕。近世Ⅰ期には資料を見い出すことができなかった。

以上，出羽の食膳具の変遷を概観すると，中世Ⅰ・Ⅳ期に画期を見い出すことができる。中世Ⅰ期には土師器・須恵器，灰釉陶器模倣器種などの古代的な器種の消滅と，椀・皿という2器種への器種の単純化である。中世Ⅳ期はかわらけの使用形態の変化と，出土事例の減少があり，中世Ⅴには新たな京都型手づくねかわらけが成立する。したがって，中世Ⅳ期を画期ととらえておきたい。

陸奥中・南部・出羽の食膳具の変遷を通して，中世Ⅰ，Ⅳ期の画期を認めうる。中世Ⅰ期は器種構成上も中世的な食膳具の成立期であり，中世Ⅰ～Ⅲを通じて，饗宴儀礼のためのかわらけの大量使用・大量廃棄が一定程度認められる時期がある。器形・法量・技法とも地域を越えて斉一性が強い。京都型かわらけとの互換性も認められる。中世Ⅳ期にはかわらけの使用形態が変化し始め—灯明皿化，技法的には「底部板状圧痕＋見込みナデ」が消失し始め，法量も3法量に大中小となる地域もある。また，出土の絶対量や出土遺跡数が減少する。中世Ⅴ期には京都型手づくねかわらけの再流入があるが，近世への胎動は始まっている。

❺……陸奥中南部・出羽（宮城・福島・山形）

煮炊具

陸奥南部と出羽の煮炊具の変遷については，資料的な制約から一緒に扱うこととする。また，変遷を理解する上で必要な他地域の資料については，適宜使用した。中世の煮炊具については，越田賢一郎氏〔越田1984〕浅野晴樹氏〔浅野1991〕

五十川伸矢氏〔五十川1992〕などの優れた研究があり，それを基本に伴出遺物を考慮して，変遷を推定した。

古代の鉄製煮炊具の普及については，既に述べたことがある〔飯村1994〕ので詳述はしない。基本的に古代後期の煮炊具としては土師器甕がある。そして，金属製煮炊具としては五十川氏分類の「鍋Ⅰ」，把付鉄鍋，羽釜などを想定している。それと同時に，それを模した土製煮炊具がある。それは「鍋Ⅰ」を模倣した土製煮炊具として福島県鍛冶久保遺跡例〔飯村ほか1993〕，把付鉄鍋を模倣した福島県関畑遺跡例〔渡辺ほか1982〕〔鈴木1992〕・上ノ内遺跡例〔中山ほか1994〕，羽釜を忠実に模倣した福島県東土橋遺跡例〔山中1995〕である。こうした事例は遺存しにくい金属製煮炊具が一定の階層に，一定量普及していたことを如実に物語っているといえる。

中世Ⅰ期になると陸奥北部で内耳鉄鍋が成立し，火処の変化と相俟って，以後の東国の煮炊具の主力となる。中世Ⅰ期の遺跡自体が少ないので事例は少ないが，渥美窯から技術導入がなされて成立した宮城県水沼窯跡〔藤沼ほか1984・1992〕では，羽釜が生産されている。もちろん，渥美窯から単純に器種構成も移入された可能性があるので問題はあるが，一定の需要があった可能性も視野に入れておきたい。中世Ⅱ期には岩手県柳之御所跡でみられるような内耳鉄鍋は当然存在し，石鍋は長崎県西彼杵半島の産とされ，搬入品である。中世Ⅲ期にも内耳鉄鍋は当然存在すると推定されるが，図示可能な資料がない。

また，山形県大楯遺跡の石鍋や宮城県新田遺跡の伊勢系土鍋〔千葉ほか1992〕のような特殊な搬入品も見られ，都市鎌倉的な遺物とも言える。

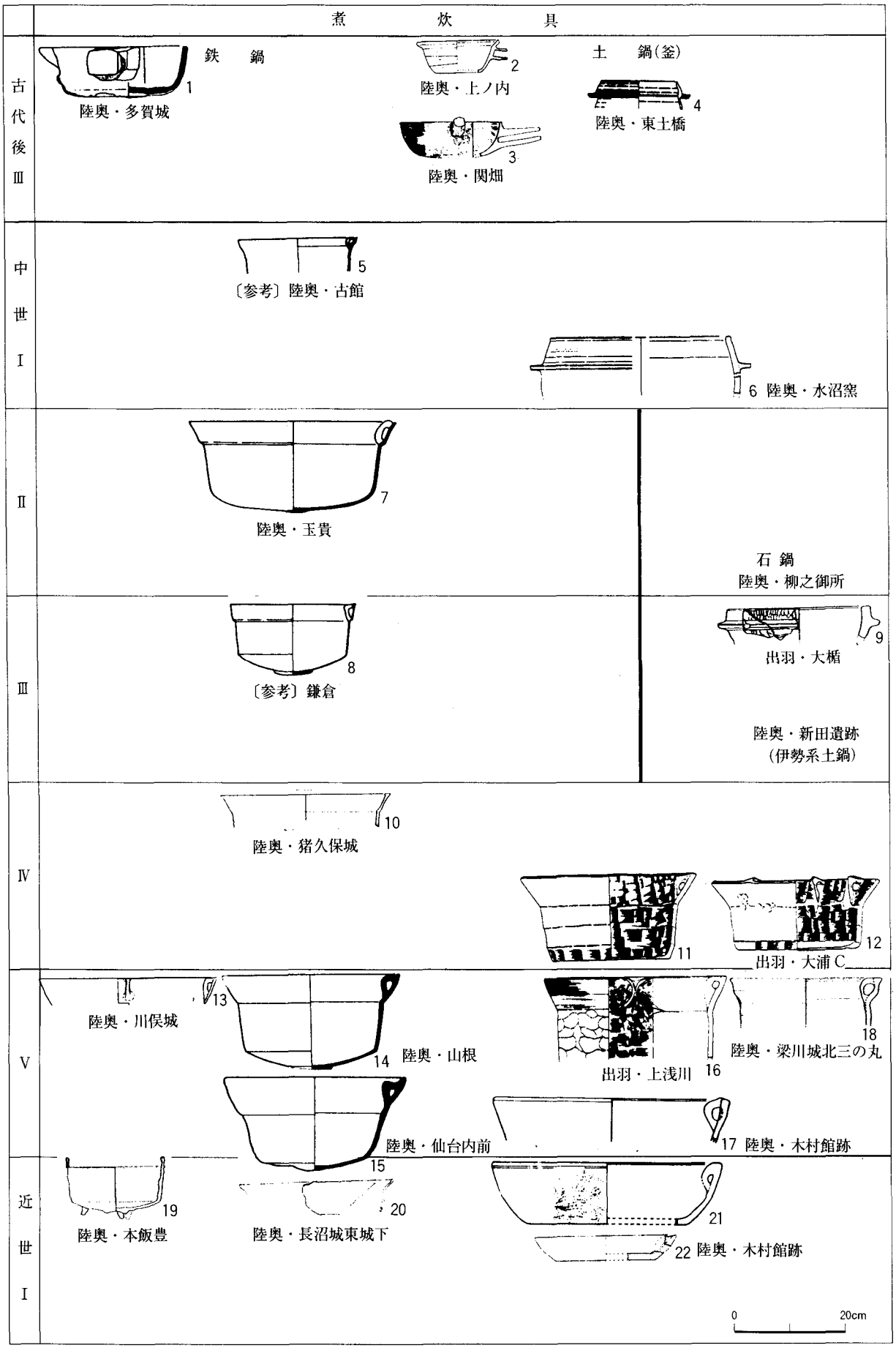
中世Ⅳ期になると，内耳鉄鍋とともに，それを模した内耳土鍋が成立する。瓦質のものは少なく，土師質のものが多い。この内耳土鍋は中世Ⅳ・Ⅴ期，近世Ⅰ期まで存続し，次第に焙烙化する〔松本ほか1992〕か，消滅する。この内耳土鍋の分布を図6で見ると，米沢盆地から福島盆地，福島県の中通り中・北部にほぼ限定でき，戦国大名伊達氏の領国と重なる点が，偶然とは考え難い。内耳鉄鍋は口径約30cm前後のものが多く見られ，耳の位置や口縁部の形態がやや変化しながら，近世Ⅰ期まで存続する。湯口は「丸湯口」がほとんどである。16世紀末から17世紀前葉には福島県本飯豊遺跡例〔本間ほか1993〕のような吊耳鉄鍋が出現してくる。口径17cm前後と小型で，吊耳が2か所，棒状の三足が付く。丸湯口である。

以上煮炊具の変遷を概観すると，中世Ⅰ・Ⅳ期に画期が認められる。中世Ⅰ期は内耳鉄鍋の成立期であり，Ⅱ・Ⅲ期を通して，様々な材質・器形の煮炊具が採用されては，消えていく。しかし，中世Ⅳ期になると，内耳鉄鍋とその模倣品である内耳土鍋の2種にほぼ限定されて，近世Ⅰ期まで継続する。鉄鍋はⅣ期以降，器形・法量的にも斉一性が強くなり，型式的な変化を遂げる。この時期には安定的な量産体制—大規模生産地—が確立した可能性が指摘できる。また，土製煮炊具が内耳土鍋に限定されることも，それと表裏を成した現象と考えている。

調理具

中世Ⅳ・Ⅴ期，近世Ⅰ期を通じて，陸奥・出羽では瓦質擂鉢が一定量存在する。陸奥南部や出羽の米沢盆地周辺で見る限り，瀬戸・美濃の擂鉢より多い。在地産擂鉢は基本的に瓦質で，中世Ⅳ期には成立する。形態変化に乏しいが，口径30cm前後を測り，やや内湾する体部で強く外に張り出す口縁端部を有するものから，直線的に「ハ」字形に開く体部から張り出しの少ない口縁端部を有する形態へ変化する。近世Ⅰ期には仙台

図5　陸奥中南部・出羽


煮　炊　具
古代後Ⅲ
鉄　鍋
1
陸奥・多賀城
2
陸奥・上ノ内
土　鍋(釜)
4
陸奥・東土橋
3
陸奥・関畑
中世Ⅰ
5
〔参考〕陸奥・古館
6 陸奥・水沼窯
Ⅱ
7
陸奥・玉貴
石 鍋
陸奥・柳之御所
Ⅲ
8
〔参考〕鎌倉
9
出羽・大楯
陸奥・新田遺跡
(伊勢系土鍋)
Ⅳ
10
陸奥・猪久保城
11
12
出羽・大浦C
Ⅴ
13
陸奥・川俣城
14
陸奥・山根
出羽・上浅川 16
18
陸奥・梁川城北三の丸
15
陸奥・仙台内前
17 陸奥・木村館跡
近世Ⅰ
19
陸奥・本飯豊
20
陸奥・長沼城東城下
21
22 陸奥・木村館跡
0
20cm

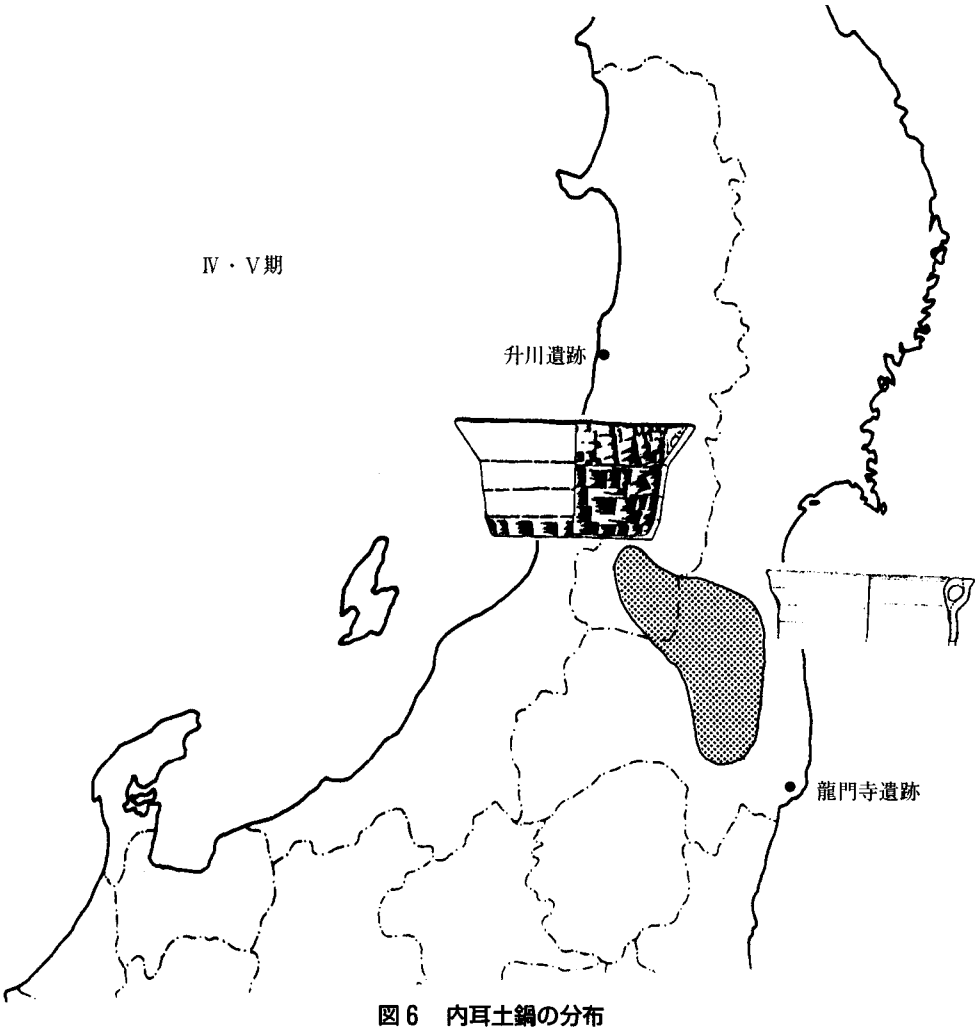


図6 内耳土鍋の分布

城三の丸跡出土例〔佐藤ほか1983〕のように，小型化し，矮小化した形態になる。

この瓦質擂鉢のモデルについてはにわかに断定し難いが，前代の瓷器系陶器生産〔飯村1988・92・94〕での片口鉢の生産を考慮すると，その系譜を引くものと考えるのが素直である。しかし，その終末段階と考えられる宮城県一本杉窯跡〔早川1992・93 菊池逸夫氏ご教示〕でも，卸目を施す片口が少ないことや口縁部形態の違いなどは，やや問題とはなるが，材質の違いや型式差などとして捉えることが可能であり，その系譜関係を指摘しておきたい。こうした独特の擂鉢のほかに，瀬戸・美濃大窯期の擂鉢を模倣したものが，少数例見られる〔松本ほか1992〕〔本間ほか1993〕。

瓦質擂鉢は陸奥から出羽に普遍的に分布するが，その中でも出土量が多いのは，福島・米沢盆地，郡山・田村地方であり，内耳土鍋と同様に，戦国大名伊達氏の領国であり，その関連が想起される。在地産擂鉢は基本的に瓦質であり，瓦工人との関連が考えられる。福島県伊達地方では伊達氏による寺院造営が盛んになる中世Ⅳ期に，瓦生産が降盛することは既に指摘しており〔寺島ほか1991〕，その時期に軌を一にして瓦質土器生産が開始されることは，その関連を如実に物語っている。

近世Ⅰ期の事例ではあるが，宮城県大沢窯跡では1650年前後に松島瑞巌寺に供給された瓦の捨場

が調査され，火鉢や擂鉢といった瓦質土器も生産されていたことが分かっている〔藤沼ほか1987〕。また，福島県三春町丈六窯跡では近世後半期の瓦質土器・瓦・土師質土器の窯跡が調査され，瓦質土器と瓦が併焼されていることが，確認されている〔平田1995　平田禎文氏のご教示〕ことは注目される。これによって瓦工人と瓦質土器工人の同一性がわかる。

まとめ—器種組成の変遷と特質—

器種組成を検討できる遺跡が少ないことから，中世前期については岩手県平泉町柳之御所跡と山形県遊佐町大楯遺跡を取り上げ，中世後期については西山眞理子の研究〔西山1994〕に拠ることとした。

中世Ⅱ期の柳之御所跡については，既に八重樫忠郎氏が詳細な分析・検討を加えている〔八重樫ほか1994〕。柳之御所跡は『吾妻鏡』に見える「平泉館」の可能性が指摘され，一時期の陸奥国府の機能を有していたことが示唆されている遺跡である。時期は12世紀中葉から後半にほぼ限定できる。

「堀跡内部地区（岩手県調査分）」の報告書は未刊であるが，八重樫氏の分析によると，「堀跡内部地区」は1 m^3 当たりの出土土器は破片数で1.86点であり，かわらけが約79%，国産陶器が約20%，中国陶磁器が約1%である。「堀跡外部地区」は1 m^2 当たり出土土器は破片数で1.49点とやや少ない。かわらけが約52%，国産陶器約44%，中国陶磁器約4%であり，かわらけの比率が低く，陶磁器の比率が高く，堀跡の内と外における「場」の性格の違いを強く反映している。

そのうち，中国陶磁器の比率を見ると，白磁の比率が高いのは当然だが，「堀跡内部地区」は青白磁・陶器の比率が比較的高く，それに対して「堀跡外部地区」は青磁の比率が比較的高い。八重樫氏は遺跡の「時期差」と指摘している。また，堀跡の内外とも，「袋物」の比率は60%前後を占める特徴があり，「袋物志向」とも言うべき特質が指摘できる〔小野1993〕。国産陶器は常滑・渥美がほぼ同数で多数を占め，ほかに須恵器系陶器や水沼窯などの在地産瓷器系陶器など製品が少数見られる。器種は壺・甕が圧倒的で，山茶碗がごく少量見られる程度である。

また，八重樫氏は志羅山遺跡第21次調査区と比較し，1 m^2 当たりの出土土器が3.22点と多いことや，中国陶磁器の組成が「堀跡内部地区」の組成に類似すること，椀・皿などの器種が多いことから，柳之御所跡との関連で志羅山遺跡の時期・性格を問題視している。

中世Ⅱ期の柳之御所跡の食品組成を見ると，食膳具は5万点とも言われる圧倒的なかわらけに対して，700点前後の白磁・青白磁・青磁の椀・皿がある程度である。陶磁器の90%以上は壺・甕類の「袋物」である。「かわらけ」は「晴の器」であるとされ〔藤原1988〕〔小野1993〕〔松本1992・93・94〕，公式の饗宴儀礼に用いられたとされ，その異常な出土量から見ても，日常食器とは考え難い。と仮定すると，中国陶磁器と山茶碗しか食器となり得ない。したがって，出土量の絶対数は少ないものの，古代以来その重要性が指摘〔仲田1993〕〔三浦1990〕されつつあり，工人の存在が想定されている，漆器を想定せざる得ない〔本澤1991〕〔三浦1991〕。中世Ⅱ期の日常の食器に限定して言えば，遺存しているものとしては白磁・青白磁が主であり，存在を推定できるものとしては漆器がある。

もう一つ中世Ⅱ期の代表例として，山形県遊佐町大楯遺跡〔伊藤1988・89・94〕がある。日本海

側では最北の摂関家の荘園である遊佐荘の荘家あるいは出羽の留守所関連と考えられ，13～14世紀まで存続する遺跡である。その中心時期は13世紀前葉と推定され，柳之御所跡に後続する遺跡である。遺構としては，宗教施設などや建物群が調査されている。

出土遺物は1 m^2 当たり破片数で，約2.5点出土し，柳之御所跡を上回る。その比率を見ると，かわらけが約80%，珠洲・越前が約15%，中国陶磁器が5%に満たない。中国陶磁器では青磁が圧倒的であり，時代の違いを示している。「袋物」も青白磁の梅瓶や青磁水注などがある。国産陶器では珠洲の比率が高く，時代性を示している。珠洲や越前の出土は日本海域流通圏の特質を示し，青磁の比率の高さは，白磁—柳之御所跡段階—から，青磁—大楯遺跡段階—への転換を見事に示している〔八重樫ほか1994〕。

食器組成を見ると，柳之御所跡と同様に「かわらけ」が圧倒的であり，約16,000点の「かわらけ」を除くと，500点前後の青磁・白磁の椀・皿やわずかな古瀬戸しか残らない。しかし，漆器の椀・盤なども少し出土しており，その中には都市「鎌倉」〔斉木ほか1993〕や宮城県松島町円福寺跡〔新野1992・93〕などでしか見られないスタンプ文様を持つ漆器もあり，その存在が重要視される。やはり中世Ⅱ期の食器としては，遺存しているものとしては中国陶磁器とごく少量の国産陶器であり，遺存していないものとして漆器を想定しておきたい。

中世Ⅲ期の良好な遺跡も調査されているが，未報告なものが多く，中世Ⅳ期以降の陸奥南部の事例を，西山眞理子の研究〔西山1994〕に拠り見ていきたい。中世Ⅳ期の福島県いわき市砂屋戸荒川館〔中山ほか1985〕は，14世紀中葉から15世紀前半の山城跡である。30,000m^2 を調査して，1,400点余の遺物が出土しているが，かわらけが約50%，瀬戸・美濃が約20%，中国陶磁器が約20%，常滑・渥美が約5%，瓦質土器が3%程度である。

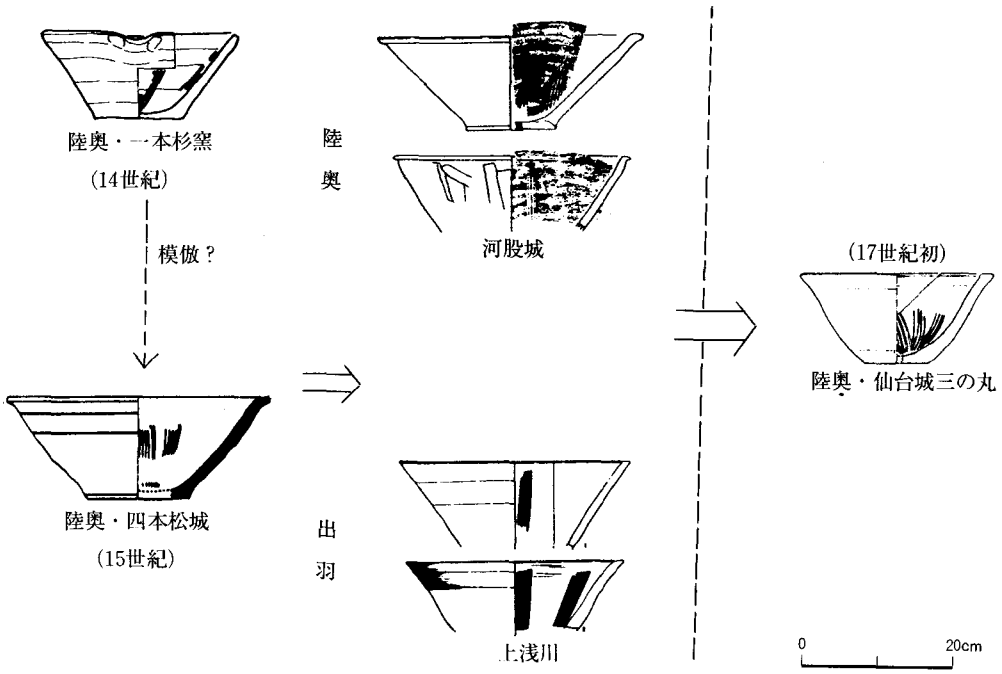


図7 瓦質擂鉢の変遷

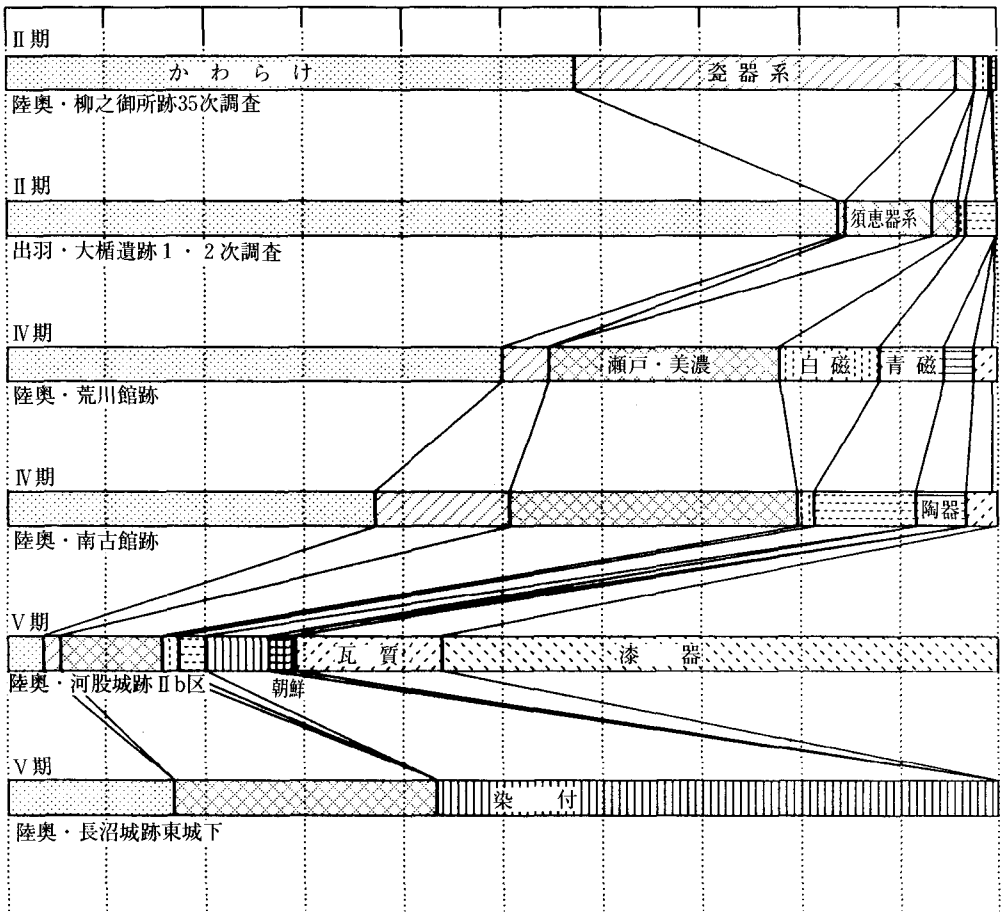


図8　陸奥南部・出羽の土器組成の変遷

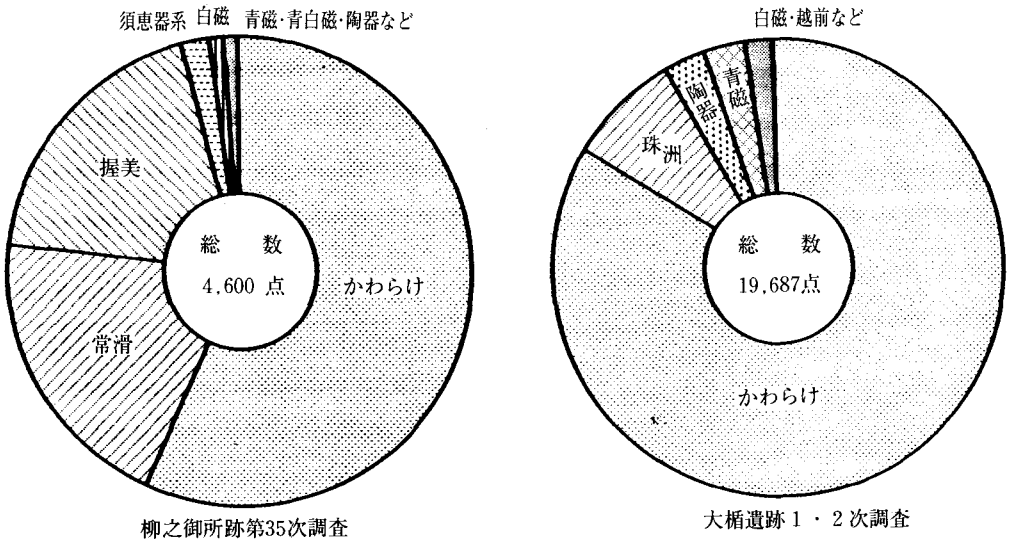


図9　陸奥・出羽の中世前期の土器組成

同じく中世Ⅳ期の福島県長沼町南古館〔市川1988〕は，15世紀前半を中心とする平地居館である。約290点の遺物が出土しているが，かわらけが約35%を占め，瀬戸・美濃が約30%，中国陶磁器が約15%，瓷器系陶器が約15%である。ほかに瓦質土器や漆器などがある。中世Ⅳ期の食器組成を見ると，「かわらけ」の比率は減少しているものの依然として高く，「灯明皿」として使用されているものが少いことから，「晴」の饗宴儀礼に使用されたことが想定される。ほかに食器としては，100点前後の瀬戸・美濃や青磁・白磁・染付の椀・皿とともに，南古館などで少量出土している漆器・木器も，視野に入れておく必要がある。

中世Ⅴ期の調査例は多いのではあるが，組成を資料化した事例が少く，ここでは福島県川俣町河股城跡と長沼町長沼城跡を挙げた。河股城跡Ⅱb区〔高橋ほか1993・94〕では約5,900m^{2}の調査で約111点の遺物が出土し，山城の谷戸に屋敷割りされて，職人集団が居住していたことが明らかとされている。漆器が約55%を占め，中国・朝鮮陶磁器が約10%強，瀬戸・美濃が約10%，かわらけは5%未満である。長沼城跡東城下〔市川1990〕は調査途中で保存になった遺跡であり，資料的に問題はあるが，参考までに組成を見ると，染付の椀・皿が圧倒的で，瀬戸・美濃の椀・皿がそれに次ぎ，かわらけも少量見られる〔西山1994〕。以上の少ない事例ではあるが，中世Ⅴ期の食器組成を見ると，漆器の極端な比率の高さや，国産陶器を凌駕する中国・朝鮮陶磁器の比率の高さが指摘できる。また，かわらけの比率が極端に減少し，「晴の器」としての性格が失われ，「灯明皿」として使われている。いずれも煮炊具である鉄鍋の出土があり，中世Ⅳ期は鉄鍋の出土が良く見られる時期でもある。遺跡の性格や調査地点の性格を考慮しなければならないが，大まかな傾向性としては指摘できる。

陸奥南部を中心に，食器組成の変遷を概観したが，資料的な制約が多く，不十分の感は否めないが，食器組成の特質をまとめておきたい。現象面から言えば，中世Ⅱ期は「かわらけ＋白磁の時代」，中世Ⅳ期は「かわらけ＋古瀬戸の時代」，中世Ⅴ期は「漆器・染付・朝鮮陶器の時代」とすることができる。おそらく中世Ⅰ期は岩手県平泉町中尊寺金剛院下層〔及川1994〕をみると「(ロクロ) かわらけの時代」となり，中世Ⅲ期は大楯遺跡を参考にすると，「かわらけ＋青磁の時代」ということになるであろう。しかし，こうした現象面の向こう側には常に，遺存しにくい漆器・木器・金属製品があることを，無視する訳にはいかない。こうした現象面から言えば，中世Ⅴ期に顕現化する「かわらけ」の性格の変化や，漆器・鉄鍋の顕在化を画期とみる。しかし，こうした食器組成に顕在化してくる現象の端緒は，中世Ⅳ期にあったことは，既に指摘したところである。

(㈶福島県文化センター，国立歴史民俗博物館共同研究協力者)

引用・参考文献

浅野晴樹　1991　「東国における中世在地系土器について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第31集　国立歴史民俗博物館
飯村　均　1988　「福島県における中世陶器生産の様相」『東国土器研究』第1号　東国土器研究会
飯村　均　1990　「80年代の研究成果と今後の展望　東北」『中近世土器の基礎研究』Ⅵ　日本中世土器研究会
飯村　均　1992　「福島県の中世窯業」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』大戸古窯跡群検討会
飯村　均　1994　「平安時代の鉄製煮炊具」『しのぶ考古』10目黒吉明
飯村　均　1994　「陸奥南部の常滑系陶器の生産と技術」『中世常滑焼を追って』日本福祉大学知多半島総合研究所
飯村　均　1995　「陸奥南部における南北朝・室町前期の山城」『論集しのぶ考古』刊行会
飯村　均ほか　1984　「伝・安泰寺跡出土の燈明具」『福島考古』第25号　福島県考古学会
飯村　均ほか　1993　『東北横断自動車道遺跡調査報告23　鍛冶久保遺跡』福島県教育委員会　㈶福島県文化センター

飯村　均ほか　1994　『東北横断自動車道遺跡調査報告28　猪久保城』福島県教育委員会　㈶福島県文化センター
猪狩忠雄ほか　1990　『龍門寺遺跡』いわき市教育委員会・㈶いわき市教育文化事業団
五十川伸矢　1992　「古代・中世の鋳鉄鋳物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集　国立歴史民俗博物館
板橋範芳ほか　1987　『矢立廃寺発掘調査報告書』大館市教育委員会
市川一秋　1988　『南古館跡』長沼町教育委員会
市川一秋　1990　『長沼城跡』長沼町教育委員会
伊藤邦弘　1988　『大楯遺跡第１次発掘調査報告書』山形県教育委員会
伊藤邦弘　1989　『大楯遺跡第２次発掘調査報告書』山形県教育委員会
伊藤邦弘ほか　1990　『藤島城跡第２次発掘調査報告書』山形県教育委員会
井上雅孝ほか　1994　「滝沢村大釜館遺跡出土の古代末期の土器について」『岩手考古学』第６号　岩手考古学会
恵美昌之　1992　「名取熊野堂大館跡発掘調査報告」『宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
恵美昌之　1993　『名取熊野三山遺跡群』名取市教育委員会
及川　司　1994　「平泉のかわらけ」『柳之御所跡の検討資料』
大越道正ほか　1985　『母畑地区遺跡発掘調査報告19　荒小路遺跡』福島県教育委員会　㈶福島県文化センター
押山雄三ほか　1985　『郡山東部Ⅴ　艮耕地Ａ遺跡』郡山市教育委員会
小野正敏　1991　「城館出土の陶磁器が表現するもの」『中世の城と考古学』新人物往来社
小野正敏　1993　「中世みちのくの陶磁器と平泉」『日本史の中の柳之御所跡』吉川弘文館
利部　修　1995　「横手盆地の古代遺跡と払田柵跡」『第21回古代城柵官衙遺跡検討会資料』古代城柵官衙遺跡検討会
加藤道男　1981　「植田前遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』Ⅴ宮城県教育委員会
越田賢一郎　1984　「北海道の鉄鍋について」『物質文化』42　物質文化研究会
斉木秀雄ほか　1993　『佐助ヶ谷遺跡発掘調査報告書』佐助ヶ谷遺跡発掘調査団
桜田　隆　1990　『エヒバチ長根窯跡・大川口館跡・烏野遺跡』二ツ井町教育委員会
佐藤禎宏ほか　1991　『大楯遺跡第３・４次発掘調査報告書』遊佐町教育委員会
佐藤庄一ほか　1974　「須走遺跡」『庄内広域営農団地農道整備事業関係遺跡分布調査報告書』山形県教育委員会
佐藤庄一ほか　1974　「横川遺跡」『庄内広域営農団地農道整備事業関係遺跡分布調査報告書』山形県教育委員会
佐藤　洋ほか　1993　『今泉城跡』仙台市教育委員会
佐藤　洋ほか　1985　『仙台城三の丸跡発掘調査報告書』仙台市教育委員会
新野一浩　1992　「松島町円福寺跡」『宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
新野一浩　1993　「松島町瑞巌寺境内遺跡」『宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
鋤柄俊夫　1995　「平安京出土土師器の諸問題」『平安京出土土器の研究』㈶古代学協会
鈴木　啓ほか　1974　『新宮城跡発掘調査報告書』喜多方市教育委員会
鈴木　啓ほか　1976　『四本松城跡』岩代町教育委員会
鈴木雅文　1992　「福島県本宮町関畑遺跡出土の緑釉手付瓶」『福島考古』第33号　福島県考古学会
高橋圭次ほか　1993　『河股城跡検討会資料』川俣町教育委員会
高橋圭次ほか　1994　『河股城跡の概要』川俣町教育委員会
高橋信一ほか　1992　『東北横断自動車道遺跡調査報告17　堀ノ内遺跡』福島県教育委員会　㈶福島県文化センター
高橋與右衛門ほか　1988　『笹間館跡発掘調査報告書』㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
千葉孝弥ほか　1990　『新田遺跡』多賀城市埋蔵文化財調査センター
手塚　孝ほか　『大浦Ｃ遺跡発掘調査報告書』米沢市教育委員会
寺島文隆ほか　1991　『茶臼山西遺跡・輪王寺跡』梁川町教育委員会
仲田茂司　1993　「東国古代の挽物」『考古学研究』156号　考古学研究会
中山雅弘　1985　「福島県における中世土器の覚書」『東洋文化研究』第４号
中山雅弘　1988　「福島県における中世土器の様相」『東国土器研究』第１号　東国土器研究会
中山雅弘　1992　「福島県の手づくねかわらけ」『いわき地方史研究』第29号　いわき地方史研究会
中山雅弘ほか　1985　『砂屋戸荒川館調査概要』㈶いわき市教育文化事業団
中山雅弘ほか　1994　『上ノ内遺跡』いわき市教育委員会・㈶いわき市教育文化事業団
長山幹丸ほか　1992　『大畑・桧山腰窯跡発掘調査報告書』南外村教育委員会
西山眞理子　1994　「南陸奥の焼物は何を語るのか？」『福島考古』第35号　福島県考古学
畠山憲治　1981　『内村遺跡発掘調査報告書』秋田県教育委員会
服部実喜　1995　「南武蔵・相模における中世の食器様相③」『神奈川考古』第31号　神奈川考古同人会
早川英紀　1992　「白石市一本杉窯跡」『宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
早川英紀　1993　『白石古窯跡群一本杉窯跡中間報告』
平田禎文　1995　『丈六焼見学会資料』福島県考古学会中近世部会
藤原良章　1988　「中世の食器・考―〈かわらけ〉ノート」『列島の文化史』５　日本エディタースクール出版部
藤沼邦彦ほか　1984　『水沼窯跡発掘調査報告』石巻市教育委員会

藤沼邦彦ほか　1987　『硯沢・大沢窯跡ほか』宮城県教育委員会
藤沼邦彦ほか　1991　「多賀城跡出土の中世遺物」『多賀城市史』第4巻　多賀城市
本間　宏ほか　1993　『東北横断自動車道遺跡調査報告22　馬場平B遺跡』福島県教育委員会　(財)福島県文化センター
本間　宏ほか　1993　『東北横断自動車道遺跡調査報告24　本飯豊遺跡』福島県教育委員会　(財)福島県文化センター
松本健速　1992　「柳之御所跡におけるかわらけ存在の意味」『紀要』XII　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
松本健速　1993　「柳之御所跡出土かわらけ編年試案」『紀要』XIII　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
松本健速　1994　「ロクロかわらけと手づくねかわらけ」(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
松本　茂ほか　1992　『東北横断自動車道遺跡調査報告15　木村館跡』福島県教育委員会　(財)福島県文化センター
三浦圭介　1990　「日本海北部における古代後半から中世にかけての土器様相」
『シンポジュウム土器からみた中世社会の成立』シンポジュウム実行委員会
三浦謙一　1991　「柳之御所跡出土の木製品―速報―」『紀要』XI　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
村田晃一　1994　「土器から見た官衙の終末」『古代官衙の終末を巡る諸問題』東日本埋蔵文化財研究会
村田晃一　1995　「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古』第36号　福島県考古学会
室野秀文ほか　1991　『盛岡城跡』盛岡市教育委員会
目黒吉明ほか　1993　『梁川城跡III』梁川町教育委員会
本澤慎輔　1991　「考古資料にみる平泉　木製品編」『広報ひらいずみ』412　平泉町
八重樫忠郎　1994　『柳之御所跡発掘調査報告書』平泉町教育委員会
八重樫忠郎・飯村均　1994　「東日本における土器からみた貿易陶磁器」『第13回研究集会報告資料』中世土器研究会
八重樫忠郎　1995　「藤原氏滅亡以降の土器様相」『都市遺跡検討会資料』都市遺跡研究会
八木光則　1989　「安倍・清原氏の城柵遺跡」『岩手考古学』第1号　岩手考古学会
八木光則　1993　「陸奥中部における古代末期の土器群」『歴史時代土器研究』第8号　歴史時代土器研究同人会
八木光則ほか　1983　『大館遺跡群　大新町遺跡』盛岡市教育委員会
八木光則ほか　1994　「岩手町出土の古代末期の土器」『岩手考古学』第6号　岩手考古学会
柳内寿彦ほか　1986　『若松城跡三の丸跡発掘調査報告書』会津若松市教育委員会
柳沢和明　1994　「東北の施釉陶器―陸奥を中心に―」『古代の土器研究』古代の土器研究会
柳沢和明　1995　「多賀城周辺における10世紀前後の土器群」『古代末期土器群の勉強会』
柳沢和明ほか　1991　『宮城県多賀城跡調査研究所年報』多賀城跡調査研究所
柳沼賢治ほか　1983　『河内下郷遺跡群III　桜木遺跡』郡山市教育委員会
山形県埋蔵文化財センター　1993　『升川遺跡調査説明資料』
山中雄志　1995　「梁川町東土橋遺跡の調査」『第37回福島県考古学大会研究発表資料』福島県考古学会
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』吉川弘文館
吉岡康暢　1994　「食の文化」『岩波講座　日本通史』第8巻　中世2　岩波書店
渡辺一雄ほか　1982　『関畑遺跡』本宮町教育委員会